

1間の間隔は1.90～1.95mであった。16世紀中葉から後葉と推定された古川城跡の主郭の礎石確認の1間間隔は1.86mである。この1間の間隔の違いは時期差による可能性も想定される。

以上のような課題については、今後も検討を進めていきたい。

### 第3節 姉小路氏城館跡の保存・活用の現状と展望

今回の一連の調査により、前項で示した姉小路氏城館跡の歴史的な価値を述べた。当調査事業は、2017年度に文化振興課が新設されて以降、飛驒市の文化財保護行政の中心に位置付けた。これは、現在の飛驒市古川町の中心市街地や山城の麓に位置する集落の祖型が、中世から近世にかけて山城と共に営まれたものであったことが理由の一つである。姉小路氏城館跡は市民にとって馴染み深く、身近な存在である。このため、山城を守り伝えるための保存事業、調査成果を伝えるための活用事業も並行して実施してきた。

保存事業の振興として、飛驒市教育委員会では2017年度に飛驒市城跡保存活用推進協議会を設立した。市内に所在する史跡江馬氏城館跡と合わせて市域の山城全体の保全を考える会議である。市役所内から林業振興課・建設課・観光課などと、地元の保存会関係者等が出席し、それぞれの立場で山城の保全の情報を共有するものである。すでに小島城跡においては、林業整備の一環で樹木の間伐を実施し、台風被害があった際に道路復旧工事を実施した。

また、姉小路氏城館跡の調査事業で特徴的なものとして、姉小路氏城館跡の調査成果を報告文や論文という形でも発表を行ってきたことが挙げられる。これは、発掘調査・文献史料調査・歴史地理調査・測量調査の調査成果を段階的に発表し、そこで受けた意見を本報告に反映させたい意識であった（大下永2020a・2021a～f、三好清超2020a・b・2021）。その経過の中で、調査研究の継続・発信と外部との意見交換が、本事業を推進するうえで非常に大きな力になった。一方で、前節で示した課題も残っている。継続した調査研究は、姉小路氏城館跡の価値を高めるために、ますます必要になると考えられる。

活用事業としては、大きく3つに大別される事業を実施してきた。最も大きい企画は、午前中に山城跡を登り、午後からは有識者による講演というスタイルの「飛驒の山城へ行こう！」である（大下永2020b）。午後の講演は、山城が所在する地区の公民館で実施する。これまで守り伝えてきた地元に敬意を表し、地元への価値発信を重要視しているためである。また、その場に市内外から多くの山城ファンが訪問するようになると、地元の方にとっても保存活動を継続する力になるという効果もあった。例として、小島城跡の保存団体である小島城址公園整備委員会と野口城跡を保全してきた末高区に加え、黒内区が小鷹利城跡への登山道整備を実施した。価値の発信により、地元の方々が山城を大切なものと認識することにつながり、保存していく力になったと考えられた。

2つ目は、職員派遣である。第1章の普及活動で述べた通りである。依頼者と講座の目的を明確にして、学芸員が講師を務めて、小学校へ出前授業等を行った。

3つ目は情報発信である。2018年より文化財情報の掲載に特化した「飛驒市の文化財」ホームページを開設し、指定文化財の情報、発掘調査現地説明会資料などを公開している。次に、フェイスブックやインスタグラム、ツイッターといったSNS、ユーチューブといった動画配信サイトにて、日々の活動も配信した。市内に対しては、ケーブルテレビや児童生徒向けDVDにて映像配信も行っている。また、

市広報誌「広報ひだ」など従来の紙媒体での発信も継続している。さらに、市民に対して信頼度を高めるために、第3者からの発信も重要と考え、報道機関への情報提供も積極的に行い、2021年からはSNSでコメントが付いた際には返信を行った。このように、あらゆる手段による調査成果の公表と発信は市外にも情報を届けるためであり、文化財も飛騨市の認知度向上に資するために実施している。これは、発信が仲間づくりになるという、飛騨市の関係人口政策の考え方による（飛騨市2020）。

飛騨市の関係人口の考え方とは、観光以上定住未満とされる関係人口に対して、ここでは姉小路氏城館跡をきっかけに飛騨市のファンになってもらおうとするものである。文化財に関わる人を細別すると、存在を知っている人、昔から守り伝えてきた人、研究対象としている人など、多様なかかわり方が認められた。このため、その多様さを前提に、なるべく多く方が関わることが可能な在り方を模索する必要がある（三好清超2022）。姉小路氏城館跡においても、発信を受け取るツールが多種多様なことを想定し、情報が伝わるよう工夫していく必要がある。

なお、史跡江馬氏城館跡においては、飛騨神岡街づくり実行委員会へ活用部分の委託を2020年度より開始している。史跡名勝の庭園を眺めながらの食事会など多様な楽しみ方ができる企画を実施し、そこで市の学芸員が解説をしている。このような共働は、本質的価値を幅広く伝えるために有効な取組みと実感している。

以上、これまでの保存・活用事業では、継続した調査研究とそれを基にした多様な成果の発信を行ってきた。それにより、前節で明らかになった姉小路氏城館跡の本質的価値が市内外に浸透しつつあると認識している。すなわち、姉小路氏城館跡という文化財が、市民に愛着を生じさせるだけではなく、市外の方が飛騨市を応援するきっかけになっているのである。今後も、飛騨市民、岐阜県民、国民へ姉小路氏城館跡の情報をあらゆるツールで発信し、関わりを作り保ち続け、姉小路氏城館跡の次世代への継承につなげていきたい。そのために、姉小路氏城館跡の保存と活用が循環する仕組みを示す保存活用計画を策定し、このような展望を評価する仕組みづくりも示す必要があると考えている。

## 【第7章 主要引用参考文献】

- 井川祥子 2006 「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』 高志書院  
内堀信雄 2021b 「戦国美濃の土器・陶磁器」『戦国美濃の城と都市』城郭研究叢書3 高志書院（初出：2011 「戦国美濃の土器・陶磁器」『考古学と陶磁史学 佐々木達夫先生退職記念論文集』佐々木達夫先生退職記念事業実行委員会）  
藤澤良祐 2008 『中世瀬戸美濃窯の研究』高志書院